

第2版 序

2011年9月に『婦人科・乳腺外科疾患ビジュアルブック 初版』を刊行して以来、あっという間に6年が過ぎてしまった。この短い期間に他科疾患同様、婦人科・乳腺外科疾患の診断・治療は大きく変貌した。これに対応するべく第2版を発行するに至った。

わが国の少子化はさらに進み、2016年にはついに年間出生数が100万人を切ってしまった。その一方で、初版刊行後「妊活」という略語がポピュラーになり、生殖補助医療(ART)による出生数は5万人に迫る勢いで、20人に1人は体外受精児の時代に突入した。おそらくこの比率は増え続けるであろう。そこで、第2版では、生殖補助医療にかかわる項目を大幅に増やし、より充実した内容とした。

女性器疾患では、わが国の乳癌は増加の一途で、一生のうちに乳癌に罹患する女性は11人に1人になり、より身近な悪性腫瘍となった。また、乳癌と卵巣癌は、一部が共通の遺伝子異常による遺伝性癌であることがわかり、その遺伝子検査が可能な時代に突入した。遺伝性癌のことを考慮した婦人科腫瘍の国際(WHO)分類が2014年に11年ぶりに大幅に改訂され、わが国の婦人科腫瘍取扱い規約、治療ガイドラインも大きく変更された。そこで、第2版では、2017年時点で最新の婦人科腫瘍取扱い規約、治療ガイドラインに則った形に内容を改変した。

初版同様、第2版も臨床の現場で女性患者さんと接する機会が多いすべての医療従事者、それを目指す学生諸君に加えて、乳癌をはじめ婦人科疾患で悩まれている患者さんとそのご家族にも役立てていただければ幸いである。

最後に、この改訂ができたのは、多忙な診療のなか、執筆に携わっていただいた先生方に加え、多くの執筆者を推薦してくださった筑波大学医学医療系産科婦人科学教授 佐藤 豊実先生、貴重な病理写真を快く提供してくださったNTT 東日本関東病院病理診断科部長 堀内 啓先生のおかげである。この場を借りて心より御礼申し上げる。

2017年9月

監修者・編者を代表して
角田 肇